

5、声の修練

ここ10年ほど前から、日本の子どもの声が弱小化してきたと言われています。かつて、どの子どもも楽に歌えた、むかしの童謡が、もとの音程で歌えない、つまり高い声が出ない。歌だけでなく話し声、読み声も貧弱です。どうしてこういう状態になったか。原因はいろいろあるでしょう。学校で音読を軽視していること、子どもの生活環境の変化も要因です。友達と遊ばず、テレビやテレビゲームに没頭する子どもが増えた。友達と大声で呼び合う原っぱがなくなった。学校では、音読のほかに、音楽がありますし、もうひとつ、徒手体操で「一、二、三、四」と呼称をつけて体を動かすことをしていましたが、これはいますっかり止めてしまいました。声を育てるための音読の強化は、ますます重要になってきました。

声が小さい、しっかりとした声が出せないということは、話し声なり読み声が周りの人に聞こえないという当面の問題だけではないのです。これは、人間を育てるということと深いつながりがあるのです。

劇作家の三好十郎さんの言葉があります。職業柄、芝居やラジオなどで、人の声にも敏感にもなっている。そのためか今までに声による人間の品定めに判断を誤ったことは少ない。すぐれた人間は良い声を出し、ダメな人間は声もダメだ。また同じ人間でも立派な気持ちの時と、いかげんか気持ちの時とは声が違う。人間の根源的なものは、最もよく声に出るものらしい。

声に出して文章を読むということは、別に難しいことではありません。まず、腰を立て、背筋を伸ばし、下腹に力を入れます。こうすると気持ちも姿勢も安定します。姿勢が決まると、肩の力を抜き、息を深く吸って、のどや、口先でなく、おなかから出てくる感じの声で読めるようにしましょう。

一体に子どもの読み方は速くなりやすいので、ゆっくり丁寧に読ませます。また、つかえずに、すらすら読むことも狙いの一つですが、読みの弱い子は、これがなかなか難題です。このつかえ読みは、低学年時代に乗り越えないとあとまで尾を引き、読むことを嫌いにさせます。

音読を楽しむするには、おかあさんと掛け合いで読むとか、読み声のバックに低音で音楽を流すとか、ときには、音読を録音して聞いてみるなどの工夫をお勧めします。さらに山や川に出かけたときは、愛読・愛唱の文や詩歌を、親子で思いっきり大きな声で暗誦してみるのも面白いと思います。



6、暗誦の功德

台北に駐在したとき、国語日報という新聞社の北京語学校で、夜、週2回学びました。2時間授業でしたが、1時間目は小学校の国語読本、2時間目は新聞や小説などを教材にしていました。先生は30歳代の美しい方でしたが、教科書で日本との戦いのくだりになると、顔を赤くし目をぎらぎらさせ強い語調で非難されました。先生としては立派な方でしたが、回が重なりと我慢できなくなりました。「先生、日本は過去の過ちを反省し、平和憲法のもと文化国家として経済や文化面で世界に貢献しようと努力しているんです。これからの日本をよくみてください」と、たどたどしい北京語でお願いしました。しかし、先生のこわばった顔は変わりませんでした。ある日、先生は「きょうは唐時代の有名な詩を習いましょう」と、杜甫の春望を書き出しました。「先生、その詩は知っています」。「では、書いてごらん」と、いうことで、黒板にすらすら書きました。高校時代に暗誦させられた詩なので、北京語に直し大きな声で暗誦しました。「あなたは詩人か」「いいえ、このような詩は日本の中学・高校で習います。特に唐時代の詩の本は愛読者が沢山いますよ」。「日本はなんて心の広い教育をしているんだろう」と、先生は感激していました。

数日して端午節になりました。先生から端午節につくる粽（ちまき）を食べに来るように招待されました。先生のお父さんは、爆風で左手がありませんでした。お母さんは、太ももに爆弾の破片がまだ残っているということでした。そのご両親が心を込めて作った粽を、感謝しながら複雑な気持ちで戴きました。

「国敗れて山河あり・・・」春になると、いまでもこの詩をつぶやき、あの粽の味を思い出しています。

海外・帰国子女教育専門機関 JOBA

〒145-0064 東京都大田区上池台3-39-9

Tel:03-5754-2240 Fax:03-5754-2241

<http://www.jolnet.com/>



日本語の教育の一環としての音読と暗誦の勧めと功德を説いた張江先生のエッセイです。

先生の音読の考え方に大賛成です。生まれも育ちもカリフォルニアの我が3人娘も百人一首の読み手として、言葉・日本語の音とリズム、そして文化と本当の多くのもの身につけました。海外の家族のゲームとして絶対にお勧めします。

私も漢詩の朗読にチャレンジしましたが、先生に恵まれなくて一時お休みです。その代わり、シェークスピアの本を片手に、私が生まれた年に出来た映画「ハムレット」のDVDを見ながら、ローレンス・オリビエの口調を真似て、私自身がハムレットを演じています。私の人生も彩られています。

最後に、前号は私の手違いで、このコラムがお休みになってしまいました。張江先生と読者の皆様にお詫び申し上げます。ごめんなさい。



張江 幸男（はりえ ゆきお）

海外・帰国子女教育専門機関 JOBA 顧問

前全日本空輸（株）海外子女教育相談室長、元三菱商事（株）相談室長、元ニューヨーク日本人学校校長、元台北日本人学校教頭